# 序章　宗教は世界をどう動かしてきたのか

宗教とその指導者が生み出された歴史を軸に、現代社会の歪みの理由を探る！

エルサレムの嘆きの壁と岩のドーム　写真提供 ユニフォトプレス

## 日本人の宗教観

宗教に対して、あなたはどんなイメージをお持ちでしょう？

多くの日本人は「無宗教」だと言います。ですが、「無宗教」と言いながら日本人の多くが正月には神社やお寺へ初詣に行き、結婚するとなれば、キリスト教の神父や牧師に永遠の愛を誓ったり、神社で結婚式を挙げたりしています。また、お産の無事、健康や受験合格をお祈りしてお守りやお祓いを受け、子供が生まれれば、神社へお宮参りや七五三の参拝をしながら、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスが年中行事になっている。お盆やお彼岸には家族や祖先のお墓参りをして、亡くなった際には僧侶に読経をお願いして葬式を執り行う。そんな人が多いのではないでしょうか。

文化庁では「宗教年鑑」という日本の宗教に関するデータを毎年公表しています。そのなかには、日本の宗教法人の数をはじめとした「宗教統計調査」が掲載されています。その調査結果によると、二〇二三年の日本人の信者の総数は「一億七二二三万二八四七人」とされています。おかしいですね、現在の日本人の総人口は、約一億二三〇〇万人ですから、総人口を総信

者数が超えてしまっています。これは、宗教団体の申告をもとに信者の総数を出しているために起こる現象です。それぞれの神社が氏子、寺が檀家をすべて自分たちの信者として報告している。つまりどちらにも所属している人が多数いるためにこのような数字になってしまうわけです。なお、その内訳は、神道系が約四八パーセント、仏教系が約四七パーセント、キリスト教系が約一パーセントとなっています。こういう状況を見ても、日本人には日本人の信仰のあり方、宗教観があるとも言えます。そんな多くの日本人にとって、世界の宗教、特に一神教の考えは理解しづらいところがあります。

本書は『世界を動かす巨人たち〈宗教家編〉』と題し、世界の宗教指導者たち（一神教の宗教に限るわけではありません）の歴史や言動に焦点を当て、宗教とその指導者たちがどれほど社会に影響を及ぼしているかを解き明かしていこうと考えています。

## 宗教との距離をどうとるか

先に挙げたように多くの日本人にとって、宗教的なものが生活のなかに入り込んでいます。当然同じように、世界の多くの国でも、宗教が文化や生活に入り込み、その根本を成している

社会もあります。ただ、宗教が日々の生活を縛り過ぎると、息苦しさも増していきます。

日本国憲法で保障されている基本的人権とは、人間が生まれながら持っている当然の権利などと説明されます。そのなかには自由権、参政権、社会権などがあり、その自由権のなかには、信教の自由という権利が含まれています。自分が信じたい宗教を信じる自由、特定の宗教が権力（国家権力）と結びつくことを抑止し、個人が信じたい宗教を信じる自由を認めるということです。

社会が近代化するなかで、こうした人権に関する意識が発達してきた結果、特定の宗教が政治に大きな影響力を持ち、個人の信教の自由を抑圧することが問題になり始めます。ヨーロッパを中心に宗教の影響力が政治に及ぶことを避けようと、徐々に政教分離の考えが広まります。その大きな画期となったのが、フランス革命です。ただ、厳密に政教分離を打ち出しているフランスのような国もあれば、政教分離を謳（うた）いつつもイギリスや北欧各国、あるいは中東のように国教と呼ばれる、国が保護したり、援助したりする宗教を定めている国もあります。やはり国民生活にとって大きな存在である宗教を完全に排除することはできず、信教の自由は確保、もしくは表明するけれど、それぞれの国が宗教とどう距離を保ち、つきあうかが、近現代の歴史における大きな課題となりました。

また、政教分離を謳うアメリカですが、大統領はその就任式で『聖書』に手を置き、宣誓を行い、最後は「神よお守りください」という言葉で締めくくります。アメリカは国の成り立ちから、キリスト教の力が極めて強い国です。プロテスタントの一派であるピューリタン（清教徒）が当時迫害を受けていたイギリスから渡り、建国したのがアメリカであり、今もプロテスタントが多数派です。プロテスタントのなかでもアメリカでは福音派と呼ばれる人たちが多くを占めています。福音派とは、『聖書』が「神の霊感」によって書かれたものであり、その内容は一字一句誤りのない神の言葉と信じている人たちです。この福音派が政治に影響力を発揮し、トランプ大統領を生み出すひとつの要因となりました。福音派の人たちは白人が多く、近年の中南米やアジアからの移民の増大で、アメリカにおいて自分たちが少数派に転落することに危機感を募らせていると言われています。中南米からの移民の多くはカトリック、アジアからの移民にはイスラム教徒が含まれています。白人のプロテスタントが建国したアメリカという歴史への思い入れが強い福音派の人たちは、トランプが大統領選挙戦で掲げた「Make America Great Again.」に、自分たちにとっての「アメリカ」を取り戻す、期待を寄せたのです（本書の第五章では、福音派の伝道師であるフランクリン・グラハムを取り上げます）。

## 宗教から現代社会の歪(ゆが)みの理由を探る

近現代化の過程で政教分離の考えが広がり、宗教の影響力が弱まったかのように思われました。しかし今、世界を見回すと、むしろ宗教の力が強まっていると言っても過言ではない事態が各地で起きています。宗教が多くの人を救っているのも事実ですが、宗教によって対立や迫害が生まれているのもまた事実です。『資本論』を著したカール・マルクスは、「宗教は民衆のアヘンである」と評しました。その言葉の評価は置くとして、宗教がある種の力を持っているのは確かです。

イスラエルとパレスチナのガザ地区の問題は、ユダヤ教とイスラム教はもちろん、キリスト教も関わり、複雑な歴史の積み重ねが引き起こしています。ロシアによるウクライナ侵攻を支持するロシア正教会にも、そのように表明する歴史的な経緯があります。新疆(しんきょう)ウイグル自治区におけるウイグル民族への弾圧、あるいはチベット民族に対する弾圧は、中国共産党の宗教への過剰な警戒心が生み出しているとも言えます。また、二〇〇一年九月一一日のアメリカ同時多発テロも、アメリカと中東の国々、イスラム教との歴史から生じ、その後の混乱は今もま

だ影響を与え続けています。日本を見ても、政治への宗教団体の影響が大きな問題となったことは、みなさんもよくご存じでしょう。

こうした世界の対立や問題がどうして起こっているのか。本書では、宗教とその指導者が生み出された歴史を軸に、現代社会の歪みの理由を探っていきます。

## そもそも宗教とは？

まず序章では、それぞれの人物を取り上げる前に、宗教について考えてみます。宗教とは、人知を超えた存在について考えたり、人間の究極的な悩みや恐れを緩和したり、人それぞれに捉え方が異なるものです。私としては、最終的には「よく死ぬための予習」とでも言えるのではないかと考えています。人それぞれに捉え方が異なるからこそ、さまざまな宗教があるとも言えます。そのなかでも世界宗教と呼ばれる宗教は、人種や民族、言語や文化、国家などの境界を超えて人々に広がった信仰で、世界三大宗教（キリスト教、イスラム教、仏教）とも言われます。

では、なぜそれらの信仰が世界宗教と呼ばれるまでに広がったのか、キリスト教を例に見て

いきましょう。